

知ってもらいたこと



中学生のBさんと面接していた時のことです。「僕のことをわかってきている人はいいんだよ。先生（教師）とか先生（私）はいいんだよ。でも、うちの人はちつともわかってくれないんだよ」と、珍しく声を大きくしながら話していました。私としては、保育園の頃からBさんについて、「両親揃って面接に来てくださり、すぐに対応してくださるなど、状況を理解して動いてくださるご家族、という印象を持っていたので、本人の様子と発言には少し驚きました。

たり、確認したり、消毒などを繰り返し症状が出てしまふなど、日常生活に支障がでている状況でした。学校では、職員や生徒も本人のことを理解して、お互いに「これは一緒にやらなくてもいいけど、これはがんばろう」といったように、折り合いをつけながら生活をしていました。ですが、その状況が続くにつれて「死にそうに疲れています」「心も身体も疲れた」と、強調することが増えてきました。そのような中で、冒頭の発言がでてきたのです。Bさんは続けてこんなことを話してくれました。

「困っていることをちゃんと伝えないと、って思う。親は他人と自分を比較して、自分を他の人と同じようにさせようとしてくる。『ふつう』に合わせることで『わかれていくの』。」

この発言を聞いて、「わかってきてくれている両親だと思っけど、自分ではそのことを伝えられたの？」と聞き返しました。すると「オレは人と違う』って言ったのに、全くわかってくれない。逆に『今までふつうにできていたのに』って言われたし。でも今までは、ふつうを演じてただけなんだよ。だからこう（強迫行動）なったのに。」「世界が違う、つてことを親に言ったのに、『じゃあ、勉強は？進路は？社会にでるのは？』と言われたし。（親の言うこともわかるけど）今はこの世界の理不尽さと戦っているかんじだよ。」と、はじめてハッキリと自分の考えていることを言葉にしてくれました。彼なりに、自分の状況をしっかりと自己理解した上で話してくれたのです。

Bさんの話を聞いて、私からも両親に状況を伝えることを提案したところ、「それもお願したいけど、もっとみんなに知ってもらいたい」ということも話してくれました。

今回の『こらぼ』は、Bさんと内容を確認しながら、「両親にも了承を頂いたもの」です。

私たちは、わかっていても、自分たちと異なること、いわゆる「ふつう」とちがうことを認めきれないことがあります。多様性を認め合うとは言っても、自分の土俵における「多様性」にとどまってしまう、「そもそも土俵が違う」という視点を持ち、そこから折り合いをつけることは、まだ慣れていないのかも

しれません。「そもそも土俵が違う上で、どうやって折り合いをつけていくか」、Bさんはこの視点をもつこと、このことを知ってほしい、という気持ちを強く持っているのです。

誰でも人に認めてもらいたい、という気持ちはありますし、思春期の子どもであれば大人に「認めてほしい」と思うのは尚更のことです。一方で、「土俵が違うからやらなくてもいい、できなくてもいい」ということではありませんが。多様性とは違いを認めたいうえで、どうやってやられるか、どうやったらできるかを、相手の立場になって考えようか。

今回Bさんがくれた視点を、私たちも大切に受け止めて考えていきたいものですね。

【本人コメント】

これを読んで、やはり自分が自分でいいんだと思えるようになってもらえると、自分の気持ちも楽になって少ずつでも、他人や親などに、「自分の価値観を押しつけない」と言えるようになってきて、なおかつ自分も、そうやって価値観の押しつけで困っている人たちの話し相手になることができるすばらしい人間な

- ・僕と同じように感じている人に伝えられたこと。
- ・自分が自分でいいんだと思えるようになってほしい。
- ・そうすると自分の気持ちも楽になって、人に意見を言うことができるかもしれない。
- ・なおかつ自分も価値観の押しつけで困っている人（同じような人達）の話し相手になれるかもしれない。
- ・みんな「そんなすばらしい人間」と思ってもらえれば、僕は嬉しい。

今回は、Bくんのご家族の意見について触れていきます。